

喬旦加布

1. 事業実施の目的

- ①中国青海省同仁県で年に一度行われているルロ祭のフィールド調査
- ②成果発表として北京の中国チベット学研究センターで行われた第 6 回北京チベット国際学会 (The 6th Beijing International Seminar on Tibetan Studies) での研究発表

2. 実施場所

- ①中国青海省黄南藏族自治州同仁県
- ②北京中国蔵学研究中心、中央民族大学

3. 実施期日

平成 28 年 7 月 15 日 (金) から 8 月 9 日 (火)

4. 成果報告

●事業の概要

この度、私は平成 28 年度地域文化学・比較文化学専攻学生派遣事業の支援を受け、ルロ祭のフィールド調査と北京の国際学会で研究発表を行った。

1)、まず、2016 年 7 月 15 日から 7 月 30 日にかけて、調査地の中国青海省同仁県のいくつかのチベット族とトゥ (土) 族の村落で年に一度、行われているルロ祭のフィールド調査を行った。この祭祀儀礼は近年、変容が激しく、今年は主に保安鎮ワォッコル村とガセドゥ村、ハラバトル村の三村において、ルロ祭を主導するハワ (シャーマン) の役割、観光開発とルロ祭の変化などについて聞き取り調査と映像による記録を行った。今回の調査では、観光化がさらに進み、演者よりカメラマンが多く増え、現地の村人と外部のカメラマンとの間にトラブルも生じた。また、変化の要因として経済発展と観光化以外に仏教の影響も強かった。近年のチベット仏教の活仏の干渉により、2014 年から当村の山羊の供養を完全にやめ、その代わりにツァンパとバターで作られた供物を供養するようになった。しかし、その規模が年々増加しつつある。一方、ネットなどを通じて周辺のチベット人から小麦粉などの無駄な供養として批判の声もあがり、今回の調査では、長老会や大学の教授などが周辺からの言論を配慮し、供養の規模がこれ以上大きくならないように決まった。



写真 1 ワォッコル村のルロ祭

2)、その後、北京に赴き、北京の中国蔵学研究中心で行われた第6回北京チベット国際学会(8月1日～7日)に出席し、「The Evolution of Folk Rites in Woke Village, Rebkong, Amdo – The Case of Two Folk Festivals Klu Rol and Shog Khang.」というテーマで研究発表を行った。



写真2 オープニングのセッション



写真3 申請者のセッション

3年ごとに開催される国際チベット学会(IATS)とならび、4～5年に1度、開催される北京国際チベット学会は、チベット研究者にとって非常に重要な学会である。今回の北京国際チベット学会は「文化の継承と社会に還元」というスローガンのもとで「中国西藏文化保護与発展協会」及び「中国蔵学研究中心」、「西藏社会科学研究院」の共同主催で行った。私は後者に今回初めて参加したが、両学会それぞれ特徴を持ち、参加者のメンバーも若干違う。国際チベット学会(IATS)の場合は欧米人を中心に外国人研究者が多いが、北京チベット学会では中国国内の研究者が圧倒的に多かった。北京のチベット学会の主催関係者の話によると今回、国内外から約416人からの学会参加の論文を提出したが、そのうち審査を経て国内外から325人の研究者の参加が決定したようである。その内、中国国内の研究者216人と海外からの研究者109人である。国籍からみると米国及び英国、日本、ロシア、モンゴル、インド、ネパールなどの18カ国の国や地域から北京に集まり、経済、社会、歴史、宗教、文化、医学、芸術、言語、生態などの19のセッションに分けられている。実質3日間にわたって研究発表を行ったが、学会の前後に主催機関による「チベットの転生活仏に関する特別展」と「明清代に北京とモンゴルにおけるチベット文献展」、「チベット学に関する図書展」など展示も行った。他には「凡尘浄土」というチベットに関する民族誌のドキュメンタリーの上映会と学会の後、「五台山の仏教僧院」の見学を行った。本学会は1991年に開催以来、これまで5回を行い、学会では、主にチベット語と中国語、英語による研究発表を行っているが、同時通訳も付いている。私は今回「文化セッション」に入り、チベット語と中国語の両言語による研究発表を行ったが、発表の際は英語への通訳があった。質疑応答を通して学术交流をすることができ有意義であったと感じる。研究センターにおいてチベット研究に関する文献収集も行い、新たな資料を入手した。さらに、北京の中央民族大学を訪問し、同仁県の地方志、山神崇拜などについて文献収集を行い、博士論文執筆のために重要なデータを収集した。なお、第6回北京国際チベット学会での発表内容は、申請者の博士論文の一部であり、その発表要旨は次の通りである。

●学会発表について

発表要旨

チベット・アムド地域ウォッコル村における土着信仰の変容について

—ルロ祭とフコン祭を事例として—

本発表ではアムド・レプコン地域(ウォッコル村)で行われている民間信仰の祭祀儀礼・夏のルロ祭と冬のフコン祭の事例を取り上げ、近年チベット各地で行われる仏教の法要が如何に土着信仰の儀礼に影響を与えているかについて考察する。

ウォッコル村のルロ祭では、転生ラマ(活仏)が2006年にインドで述べた野生動物の保護を説いたことをきっかけに、全チベット地域で川獺(かわうそ)の皮などの象徴財を民族衣装に飾る習慣がなくなった。その一方で、チベット仏教学専門の大学教授が中心となって、新廟の完成に合わせ、ルロ祭用の民族衣装を新しく統一した。また、各レベルの地方の活仏が各地で仏教の説法を盛んに行い、祭りの供儀や人々の肉食をできるだけ控えよう訴えてきた。ウォッコル村では、インド在住の高僧が2010年に中国のアムド地方に一時帰国し、ルロ祭で村のいけにえ供儀を批判した。その上で、高僧とハワ(シャーマン)との交渉によって供儀を止めさせるかわりに、現地の人々は、大麦粉のツェンパとバターで練って作られた山羊の人形を燃やして供儀を行うようになった。一方、冬のフコン祭は改革開放以降復活して来たが、ハワ(シャーマン)の世代交代の問題で未だに中断されている。供儀について現在、公的場では行わないが、村人それぞれ自家で肉を燃やして神々へ捧げている。

このように、レプコン地域では、近年、チベット仏教の活仏や学者が中心に寺院を拡大し、法要などの際、仏教の因果関係と動物への保護などを教え、仏教の復興運動が盛んに行っている。これは土着信仰の儀礼に直接影響を与え、変化をもたらすものだと言えるだろう。

●本事業の実施によって得られた成果

申請者は、2016年7月15日から7月30日にかけて中国青海省同仁県のウォッコル村とガセドゥ村、ハラバトル村の三村におけるルロ祭のフィールド調査を行った。その後、北京に赴き、中国チベット学研究センターにおいて開催される第6回チベット学国際研究学会「The 6th Beijing International Seminar on Tibetan Studies」(8月1日～7日)で、これまで行ってきた調査データの一部を研究報告し、国内外の諸チベット学研究者および人類学者、歴史研究者など多分野の研究者から有益なアドバイスをいただいた。本学会は国際チベット学会とならび、中国のチベット研究において最も規模の大きい学術研究会である。本学会において研究成果を発表することにより、申請者は研究の不足点を具体的に明らかにできると共に、チベット研究に関する様々な情報を交換することができた。申請者は、国際的なチベット学会での学術交流と資料収集を通して、研究をさらに進展させる。これらの研究成果をすべて博士論文完成へとつなげていく。

●本事業について

フィールド調査を重視する人類学を専攻するものとしてフィールド調査や学会発表などの活動は非常に重要であり、今回、地域文化学・比較文化学専攻学生派遣事業の援助を受けてフィールド調査と学会発表ができた。この事業は非常に有益な事業であり、今度とも継続して欲しい。